

コープ災害ボランティア ネットワークニュース

【第125号】2024年5月

東京都生活協同組合連合会

コープ災害ボランティア

ネットワーク幹事会

TEL : 03-3383-7800

2023年度スキルアップ講座の第4講を3月2日（土）に開催しました。東京都生協連会議室に35名が参集し、講義とワークショップで2時間20分の充実した講座となりました。

また、4月6日（土）にパルシステム東京主催の「防災まち歩き」に幹事と事務局が参加し、これで2023年度の活動は7月6日（土）に開催する総会を残すところとなりました。総会での報告に向け、幹事会は今年度の活動のまとめと次年度の計画を論議しています。

報告

スキルアップ講座 第4講 3月2日（土） 「身近な天気予報から知る自然災害 ～地球沸騰化から命を守る対策～」

講師：水越 祐一さん

気象災害からの被害の甚大化の要因は地球温暖化（地球沸騰化）とも言われ、地球規模の異常気象により、台風や豪雨、暴風の激甚化し、竜巻や山火事などが頻発しています。気象予報は災害予報といわれている通り、大切な命や暮らしを守るための的確な防災対策のためには、気象予報や災害情報を把握することが必須です。

第4講は、CO2削減会員のスキルアップとして、生協組合員と職員、地域で防災活動に取り組む人に向けて、気象予報士で防災士の水越祐一さんから、気象予報の読み解き方と防災の基礎知識を学びました。気象キャスターならではの幅広い知見と、データや画像も豊富な資料で、わかりやすい講義で、後半のグループワークも活発に進みました。



神奈川県横須賀市出身
気象予報士、防災士。NPO 法人
気象キャスターネットワーク事務局長。現在、テレビ朝日「大下
容子ワイド！スクランブル」の気
象情報を担当されています。

災害後の気象の影響

気象が引き起こす災害という点では、災害後の気象により被害が拡大することもあります。阪神・淡路大震災で六甲山地区では土砂災害が700カ所以上で発生しましたが、余震や降雨により崩壊地が2000カ所以上に増加しました。また、地震による土砂崩れで川の水がせき止められ、降雨により水がたまって形成された天然ダムの決壊で被害が生じる例も各地に多くあります。（出典：国土交通省）

IPCC「気候変動に関する政府間パネル」報告書

国連の機関であるIPCCは第6次評価報告書（2021年公表）で人間活動が及ぼす温暖化への影響について「疑う余地がない」と評価し、2035年までに温室効果ガス60%削減が必要であること、若い世代が気候変動による影響、損失や損害により強くさらされる世代間の不公平も指摘されています。

線状降水帯

2019年の台風15号では千葉県で最大瞬間風速57.5mなど暴風の被害が、台風多摩川が氾濫するなど広範囲で記録的な大雨になりましたが、台風の予測精度は向上し備える時間があります。昨今では線状降水帯による災害発生の危険度が高まっており、今世紀末には線状降水帯の発生数も1.6倍に増えるといわれています。いずれにしろ大雨が発生したら、気象庁の「キキクル」（土砂災害・浸水害・洪水害）や、指定河川洪水予報、地域の川の水位動画配信などを見て、警戒レベルに合わせた対応や避難行動を取りましょう。

ワークショップのお題は

「経験したことのない大雨、その時どうする？」

グループに分かれ、住んでいる場所・家・家族構成を決めて、「非常に強い台風が接近」「夜になった」という前提で、「避難するか？家にいるか？」「いつ何をするか？」、命を守るための行動を考えました。

「自分は大丈夫だ、危険ではない」と思いたい正常性バイアスを自覚し、家族で話し合うこと、マイ・タイムラインを作成することなど、日頃からの心構えと訓練が重要です。



IPCC 第6次評価報告書参考サイト
[環境省 令和5年版 環境・循環型社会・生物多様性白書 状況第1部第1章第2節 世界と我が国の気象災害と科学的知見から考察する気候変動 \(env.go.jp\)](#)
[別紙（日本からの IPCC AR6/WG1 報告書執筆者等） \(ima.go.jp\)](#)

講義の感想から「災害を気象の変化から読み解いて知ることができた」「毎日見ている天気予報の見方が変わるお話だった」「当事者意識を持って考える機会となった。認識していたよりも防災準備が足りないとわかった」「普段から天気予報のアプリをチェックしているがより注意して見たい。家族にもすすめたい」

グループワークの感想から「災害が起きた時にどう行動するか、とても悩んだし、本当に起こったら大変だとわかった」「自分と家族が直面する事態をリアルに考えて話し合ったことは初めて。貴重でありがたい時間だった」「住環境も年代も違う方々と話すことで、考えうる状況判断、昔の経験談、地域の情報などを聞くことができた」「細かいところまで話し合いができた。色々な案が出て行動の再確認ができた」

以上のように、講義で知識や情報を得た上でのグループワークは、実践的な学びと交流になったようです。

2023年7月に世界の平均気温が観測史上最高となり、国連のグテーレス事務総長は「地球沸騰化」と表現しました。地球温暖化による災害の激甚化は、命やくらしの危機に直結することが現実と知る講座でした。

4月6日(土) パルシステム東京主催「防災まち歩き 震災からの復興に学ぶ、私たちの防災」

関東大震災の被害と復興を学びながらまちを歩き、防災について考える取り組みに、幹事3名と事務局が参加し先導役などで協力しました。パルシステム東京の組合員14名が参加され、3つのグループに分かれて先導役の説明を聞きながら、90分程度のコースを歩きました。



両国駅に集合し、築地本願寺慈光院に到着。参拝後にお堂をお借りし、東京都立大学の市古太郎先生から「関東大震災の被害と避難生活・くらし回復に向けた歩みの概要」の講義を受けました。関東大震災の被害の概要、避難生活、避難生活支援、復興の都市計画、賀川豊彦の活動や業績などが30分にまとめられ、全体像を知ることができました。まち歩きの前習となる講義を受けてのまち歩き。とても有意義な時間となりました。



コースは、横綱公園慰霊堂→復興記念館→NTT職員殉職の碑→中ノ郷信用組合→東駒形教会。
賀川豊彦ゆかりの場所に立ち寄りながら、広域避難場所・消火器消火栓・防火水槽・コンビニなど、その役割を考えながら歩きました。



コラム by 石井 幹事

まず、能登半島地震により被害を受けられた皆さまに、心よりお見舞い申し上げます。執筆時点では能登半島地震が発生してから4か月が経過しました。この間に私(たち)は、募金や支援活動など、自分ができる範囲の支援をすすめてきました。今後も継続して被災地のことを思い、寄りそった対応をすすめていきたいと思えます。一方で今回の地震に限らず、過去の災害の教訓を活かして、災害に備えて準備していくことが肝要となります。

私は1年目の幹事としていくつかの講座に参加しましたが、特に気が付かされたことは、公助には限界があり、自助、そして共助が重要となる事です。「自らの命は自ら、家族の命は家族で守る」という自助には、私、そして私の家族はどこまで対応ができていのかと振り返ると不安があります。防災備品は食料品については最低限の準備はできていますが、寒さ、暑さへの対策は不十分です。家中の家具の転倒防止についても不十分だと、この文を書きながら気が付きました。

さらに準備が不足しているのが共助への備えです。家族構成は、私と妻、小学三年生の息子、保育園に通っている4歳の娘の4人家族です。夫婦ともに職場は近隣ではないため、隣近所の顔の見えるつながりは子供の親同士の付き合いがある程度です。マンションの隣の方のお名前や家族構成は分かりますが、2件隣になるともう分かりません。この希薄な関係性ですと相手が災害時にどのような支援を必要となるかイメージができません。(相手も同様だと思います)

自助、共助の準備を早急にすすめることはできないですが、まずは、家族と被災対応の決まり事について話をし、近隣の防災訓練に参加する事で新しい一歩を踏み出したいと思えます。